

J2.992:2

2 99

\* Kagetsu

67/14

C



花

月



# 花月

番組順——四番目太鼓。又二番目  
稽古順——謡。第二能。第一。

季——春。所——京都  
清水寺

## 曲趣

天狗ト云フ觀念ハ能ク創作時代ノ常識的觀念トシテ、幾多ノ材ヲ呈スル  
モノナレドモ、此曲ハ全ク茫洋トシテ偉大ナル天狗其物ヲ描カズ、曾テ天狗ニ誘拐サレタル少年ガ  
其經歷ヲ物語ラ眼目上ニ珍トスシ、然モ他ノ喝食物ノ曲ト同シク一種藝能ヲシテ曲ニ感アリ  
羯鼓ノ舞ノ外ニ清水寺ノ縁起ヲ語ルガ如キ、又特殊ノ俗謡ヲ挿入セル如キ、何レモ變化ヲ求  
ムト共ニ藝能ヲワク藝主旨トスルニ似タリ、此見地ヲ觀察スルニ全曲極メテ纏リヨク、可憐  
ニシテ洒脱ノ趣ヲ含ミ、深刻ナラズ正ニ上作ノ一ツルベシ。

此曲中入ルモ能ク共ニ自ラ前後二段ニ分ツヲ得ベシ。前段ハ巧ニ輕言ヲ利用シテ不思議  
ナル(シテ)ノ登場ヲ飾リ、渾味曲皇カナル名宣ニ次デ、意外ニミ謡曲トシテハ甚太膽ニ俚  
謡ヲ挿入シ更ニ花ヲ散エ梢ノ蔭ヲ射落サシムル飒爽名一節アリ、又一轉シ清水寺縁  
起ヲ歌ヒ且舞フ、其徑過ヲ按ズルニ實ニ變化ノ妙端俾スベカラザルモナリ、此再三ノ飛躍  
的急轉換ガ又決シテ不自然ノ感ヲ抱カシメザルハ作者ノ技量凡ソラザルヲ思ハシム。

茲ニ一般落劇シテ、後段ノ新展開ハ潮ワテ其經歷ヲ物語ルモノ、然モ竹影ヲ舞ヒ唱  
ヒテ我が過去ヲ既ニ一種ノ語り物トシテ作レルガ如ク、我が身ノ上ヲ又親ニ語ル態度ト云ハムヨリ、  
人ヲ慰ムトテ語ルニ似タリ、思ヒヤルコソ悲シケレト謡ヒナガウモ、流刺トシテ爽ヤカニ毫モ鬱屈  
凝滞ノ氣ナク、飄々トシテ喝食物ノ妙味ヲ示ス。前後ヲ通ジテ頗ル變化ニ富ミ、然カモ  
一貫セシ性格ハ鮮カニ認メラル。

最モ明朗ナル求道者ノ態度トモ稱スベキカ。



全篇を通じて「風」の語が多用され、  
「風」の語が多用され、  
「風」の語が多用され、

# 花月

坐順 正して（花月）  
（西あき（僧））

わき（次第）  
風に任する浮雲の風に任する浮雲のときま

りはしづくなると  
これは筑紫彦山の麓

に住まひする僧にて我俗にてひひ一時

子を一人持ちてひひを七歳と申し春の

頃行くも知らず失ひてひひそれより浮世あぢ



道行 漆  
ト議にやう  
心持ノシミ  
出ツルアリ

き無くひいて。かやりの姿と罷り成りて。都は

人の集まりにて。此春思ひ立ち都に

上り。行くを尋ねばやと思ひ。道行 生れぬ

前の身を知れば。生れぬ前の身を知れば。憐

むべき親も無し。親の無ければ我が爲に心を

留むる子も無し。千里を行くも遠からず。



小上

セ  
イ  
ス  
井  
ジ

[illegible]

上  
カルク浮ヤカ

言部

折

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

1

これは花月と申す者なり。或人我が名を何

ジヨ  
オ  
ジ  
ウ

2

ハナ

ウリ

三

上



狂言二頁  
素謡ノ時ハ  
地ヲ謡フ

果をば末期まで。一句の爲に残すと云ば人  
これを聞て。さては末世のかうそなり  
とて天下に隠れも無き花月と我を申すな  
り。狂言。來り方より。今世までも  
絶えせぬものは戀といふ曲者けに戀は曲  
者。曲者かな身はさらさらさらさらさら



て、ヤ、ズ、グ、ー、 ム、ヒ、ヒ、

さらに戀こそ寝られね

狂言シテ

一、ツキリ

鶯の花踏

み散らす細腰を、大薙刀もあらばこそ。花月合

ホソハギ

オオナギナタ

が身に敵無ければ太刀刀は持たず。弓は的マ

カタキ

タチカタナ

マ

射人哉。又かゝる落花狼藉の小鳥をも。なら

シヨオチヨオ

はわさんヲが為ぞか。異國の養田は百歩に柳

引なサリ

ヨ

イ

ハグフ

の葉を垂れ。百に百矢を射るに外さず。我は

モモ

モモヤ

ハグ

花月

三



「それは柳」  
以下心持昂  
マリ派手ニ  
引立ツ

また花の梢の鶯を。射て落さんと思ふ心は。  
 其の養由にも劣るまじある面白や  
 は柳これは櫻それは雁これは鶯それは養  
 由これは花月名こそ異るもろに隔はすも  
 あらどいぞ物見せん鶯。いぞ物見せん鶯と  
 て履きたる足駄を踏ん脱りぞ大口の稜を



△仕音  
曲運ヒアル  
曲アレド一  
句く大キリ  
出る

同音

ザラリ

狂言シノ

サシ強  
(物子ニ合ハズ)

さればにや大慈大悲の春の花

上

思へども佛の戒め給ふ殺生戒をば破るま

十  
 入  
 七  
 六  
 五  
 四  
 三  
 二  
 一

蔭に狙ひ寄つて、よく撃ちまひやうと、射ばやと

下  
カ  
ゲ  
一  
一  
一  
ネ  
ラ  
上  
下  
オ  
)  
ヤ  
)  
上  
ヒ  
ト  
リ  
一  
フ  
三  
四

高く取り狩衣の袖をうつ肩脱いで。花の本

上  
上

の水に影清（ミツト）。ヤラ  
曲（カク）抑（サマリ）と此の奇は坂の上の

一  
少  
外  
中  
外  
打切

十惡の里に芳しく。三十三身。秋の月。五濁。

上  
サ  
ラ  
リ  
  
コ  
ロ  
バ  
  
一  
上  
人  
ト  
フ  
人  
  
ゴ  
ヂ

狂言しか  
(拍子三合ハズ)

[illegible]

上  
の  
系  
一  
石

思ふに、<sup>セツシヨウカイ</sup>常の成り合ふ<sup>三ツメ</sup>殺生成をば皮とす

下


蔭に狙ひ寄つて、  
大響きひき出し、  
射はやく

カ  
ゲ  
ネ  
ラ  
ヤ  
ヒ  
ト  
リ  
フ

書と取り替へるの初を一肩用いて花の

高  
文  
寄  
由  
説  
ガ  
ヤ  
の  
一

上  
才  
上



花月

四



田村丸。大同二年の春の頃。草創あり。此方

今も音羽山オトワヤマの峰の下枝の滴りに濁るとも無き

清水の流を誰か汲まざらん。或時此の瀧の

水。五色に見えて落ちければ。それを怪しめ

山に入り。其の水ミナカミ上を尋ねらに。しんどゆせん

の岩の洞の水ホラヤハの流に埋もれて名は青柳の

の岩の洞の水ホラヤハの流に埋もれて名は青柳の

の岩の洞の水ホラヤハの流に埋もれて名は青柳の

の岩の洞の水ホラヤハの流に埋もれて名は青柳の

の岩の洞の水ホラヤハの流に埋もれて名は青柳の

の岩の洞の水ホラヤハの流に埋もれて名は青柳の



朽木あり其の木より光さし異香四方に薫  
ずればさては疑ふ所無く楊柳觀

音の御所變にてもますかと皆人手を合

はせ猶も其の奇特を知らずと申せば

朽木の柳は緑をなく櫻にあはぬ老木まで

皆白栲に花咲きけりさてこそ千手の誓



には枯れたる木にも花咲くと今の世までも

申すなり。これなる花月を如何なる者

ぞと思ひては某が俗にて失ひたる子にて

は。やがて名宣つて悦ばせばやと思ひてゐるに

花月。これこそ父の左衛門よ見忘れてあるか

久しく離れたる父に逢ひ申す事の嬉しさ



はば

在言シカ

わき

やがて連れて歸國せず。にて

物著 在言シカ

一て

我はもと筑紫の者。あたり近き彦山に登り

和

テシ

同音

上

一に。七つの年天狗に

(組子ニ合ハス)

取られて行き

中

△位

山々を思ひ遣るこそ悲しけれ。

和歌 謡正 下ノリ

「歌」

以下ノリヨカ

謡

ワヤラヤヤカ

て行き。山々を思ひ遣るこそ悲しけれ。まづ

筑紫には彦の山。深き思を四王寺。讃岐には



松山降り積む雪の白峯。さう伯耆には大

山さて伯耆には大山。丹後丹波の境なる鬼

が城と聞き―は天狗よりも恐ろ―や。

さて京近き山々さて京近き山々。愛宕の山

の太郎坊。比良の峰の次郎坊。名高き比叡

の大嶽に少―心の澄み―こそ月の横川の



流なれ<sup>ヤ</sup>日頃<sup>ハ</sup>はよ<sup>ク</sup>にのみ<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>てや<sup>ヤ</sup>止<sup>ト</sup>みなんと  
 眺<sup>ノゾ</sup>め<sup>メ</sup>に<sup>ニ</sup>葛<sup>カ</sup>城<sup>シロ</sup>や高<sup>タカ</sup>間<sup>マ</sup>の山<sup>ヤマ</sup>山<sup>ヤマ</sup>上大<sup>オホ</sup>峯<sup>ミネ</sup>釋<sup>シヤク</sup>迦<sup>カ</sup>  
 の<sup>ノ</sup>嶽<sup>タケ</sup>富<sup>フ</sup>士<sup>シ</sup>の高<sup>タカ</sup>嶺<sup>ネ</sup>に上<sup>ノボ</sup>りて<sup>テ</sup>雲<sup>クモ</sup>に起<sup>オキ</sup>き臥<sup>フシ</sup>す  
 時<sup>トキ</sup>もあり<sup>アリ</sup>か<sup>カ</sup>や<sup>ヤ</sup>に狂<sup>キヤウ</sup>ひ廻<sup>メグル</sup>りて<sup>テ</sup>心<sup>ココロ</sup>亂<sup>マシ</sup>る<sup>ル</sup>此<sup>コノ</sup>の<sup>ノ</sup>際<sup>サヤ</sup>  
 さ<sup>サ</sup>ら<sup>ラ</sup>くさ<sup>サ</sup>ら<sup>ラ</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>摩<sup>サ</sup>つて<sup>テ</sup>は<sup>ハ</sup>歌<sup>ウタ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>舞<sup>マシ</sup>りて<sup>テ</sup>は  
 數<sup>カズ</sup>へ<sup>ヘ</sup>山<sup>ヤマ</sup>々<sup>々</sup>峯<sup>ミネ</sup>々<sup>々</sup>里<sup>サト</sup>々<sup>々</sup>を<sup>ヲ</sup>廻<sup>メグル</sup>りま<sup>シ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>僧<sup>ソウ</sup>



に逢ひ奉る嬉しきよヤラ今より此の敵さつと  
捨てしさいはぶヤラあれなる御僧に連れ参ら  
せヤラ佛道レ連れ参らせヤラ佛道の修行に出づ  
るぞ嬉しかりける出づるぞ嬉しかりける△

千九百四十四年

北米  
ホストン

喜多流謡曲

柳木暢弘寫之